



大図研京都ワンディセミナーのご案内

テーマ：『効果的な情報リテラシー教育を目指して：
教育活動における教員と図書館員との連携』

概要：近年、大学図書館では教員との連携による教育活動（情報リテラシー教育）が数多く実践され報告されています。ただし、図書館員が主体的に教員との連携を図ることの必要性は認識されつつも、実際に教員・図書館員、そして学生の三者にとって意味のある、本当の意味での連携ができていない例は多くはないのでしょうか。

今回は長澤多代先生をお招きし、「所属機関・教員のニーズの予測（把握）」「教える好機（ティーチャブル・モーメント）」といったキーワードから、図書館員が教員と連携を図る上での有効なアプローチ手法や理論、さらには大学の教育機能において大学図書館が担うべき役割について考えてみたいと思います。

講師：長澤多代先生（三重大学高等教育創造開発センター）

日時：2010年6月12日（土）13:50～16:40（受付開始 13:30～）

※終了後、懇親会を予定しております。

会場：京大会館 211 号室（アクセス：<http://www.kyodaikaikan.jp/access.html>）

主催：大学図書館問題研究会 京都支部

参加費：大図研会員は無料 / 非会員は 500 円（参加費は当日、会場にていただきます。）

申込方法：6月10日（木）までに、次のいずれかの方法でお申込ください。申込多数の場合は、会場の収容人数を考慮し、早めに締め切らせていただくことがありますので、お早めにお申し込みください。

- ① 大図研京都支部のサイトから、ワンディセミナー申込フォームで申し込む
<http://www.daitoken.com/kyoto/event/20100612.htm>
- ② 支部委員会 (kyoto@daitoken.com) 宛に (1)お名前、(2)ご所属、(3)大図研の会員であるか否か、(4)懇親会に参加するか否か、(5)E-mail を知らせる
- ③ 奈良教育大学学術情報研究センター図書館 赤澤久弥 (FAX:0742-27-9147) 宛に上記の(1)から(4)を知らせる

ご不明な点などございましたら、京都支部 支部委員会 (kyoto@daitoken.com) までお問合せください。なお、京都支部では、当日の会場設営などをお手伝いいただける方を募集しています。お手伝いいただける方は、13時15分頃に会場前にお集まりください。

[目次]

大図研京都ワンディセミナーのご案内	…	1
大図研近畿4支部新春合同例会参加報告 大学図書館とキャラクターについて 谷本 千栄	…	2
大図研京都ワンディセミナー参加報告	…	3
「図書系職員のためのアプリケーション開発講習会」にみる講習会モデルと		
サービス向上・業務効率化への取り組み	大西 賢人	… 3
興味や思いをかたちに変える ～アプリケーション開発講習会の魅力	吉田 弥生	… 6
外付け機能が面白い！図書系職員が企画開発するアプリケーション	是住 久美子	… 8
第11回灰色文献国際会議参加報告	池田 貴儀	… 10

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール：kyoto@daitoken.com（大学図書館問題研究会京都支部）

URL：<http://www.daitoken.com/kyoto/index.htm>

大学図書館とキャラクターについて

谷本 千栄

2009 年 12 月に大図研に入会したので、2010 年 2 月 6 日の合同例会が初めての例会でした。「広報にキャラクターを活かす」というテーマの 2 つの講演について、その内容を報告させていただきます。

最初の講演は林成光さんによる「平城遷都 1300 年記念事業の広報について～せんとくんの活用～」なのですが、実は私はアンチせんとくんでした。今回の例会に参加するまでは。

けれど、例会の会場入口でせんとくんファンに早変わり。なぜなら着ぐるみのせんとくんが来ていたから！公式イベント以外にも出張するなんて知りませんでした。(その舞台裏については、懇親会で明らかになりました)

講演内容は、登場するや物議を醸したキャラクター「せんとくん」誕生の背景から、現在の状況についてです。

「ひこにゃん」を始めとしたゆるキャラブームのもと、平城遷都 1300 年祭でもキャラクターを採用することになりました。その目的は、(1)幅広い層へ訴えかけるためのコミュニケーションツール、(2)わかりやすさ、(3)イメージ広報、(4)キャラクターグッズによる収益というものだったそうです。

キャラクターは通常、マーケティングに基づき最も効果的なものを設定するそうなのですが、せんとくんの場合、絹谷幸二さん(東京芸大教授・奈良県出身)を委員長としたデザイン選定委員会によるコンペで選定されており、マーケティングとは無縁の芸術世界から誕生したとのことでした。

キャラ設定のためのマーケティングからではなく、アートとして誕生する過程のなかで、「幅広い層への訴えかけ、わかりやすさ」という当初の目的がどう変化していったのか、この疑問点に当日気付かず、質問できなかつたことが残念です。

ただ、アートとして誕生したからこそ、登場時のインパクトが大きく、パブリシティとして絶大な効果を発揮できたのかもしれない。大阪府立大学の荒木教授がせんとくんのパブリシティ効果を測定したところ、2008 年 2 月 24 日～2008 年 3 月 15 日の約 3 週間だけで約 15 億円の効果があったそうです。著作権の買取料は 500 万円とのことなので、費用をはるかに上回る効果です。

せんとくんで特徴的なのは、イベント開始前からキャラクターが活動しているということです。多くのイベントの場合、キャラクターの活動開始がイベント開催と同時なので、知名度が高まる頃にイベント終了ということになりがちなのだそうです。せんとくんの活躍については周知のとおりですが、せんとくんはあくまでも平城遷都 1300 年祭のパブリシティのためのキャラクターなので、キャラクターが一人歩きしないよう平城遷都 1300 年祭の「中身」をいかに広報するかが今後の課題だということでした。

二つ目の講演は嶋田晋さんの「がまじゃんぱーとちゅーりっぷさんの生態～筑波大学附属図書館でのキャラクター活用事例～」です。大学というとロゴやエンブレムが思い浮かび、キャラクターはあまり意識したことがありませんでした。図書館のキャラクターとなればなおさらだったのですが、注目するようになったのはリポジトリの影響があるように思います。

筑波大学附属図書館の場合、NII のプワンとピヨ太郎・北海道大学のはすかつぷちゃんなど先行事例の影響はあったようですが、キャラクター誕生に一番大きく作用したの

は「機を逃さなかった」ことだと感じました。職員の間には広報に対する苦手意識を克服したいというベースがあり、システム更新により新しいことを始めるきっかけができたことで、キャラクターを作ろうという有志が結集したそうです。

その後、組織改編により広報関係担当部署ができてからも、講演依頼などには当初の有志グループが対応しているそうです。また担当部署ができたことにより、オープンキャンパスなどオフィシャルな場面での活用が増えたそうです。

産みの苦しみはあったものの、楽しんで作ったとのこと。キャラクター製作の頃に話題だった「スキージャンプペア」が、がまじゃんぱーの名前の由来ということからも、その様子がうかがえました。また楽しんで作ったことが、成功するキャラクター誕生とその後の広報活動への活用につながっているように思いました。

キャラクターができたことで職員の広報に対する意識が高まり、事務文書ではなく「見てもらうもの」、「掲示物」「配布物」ではなく POP へ、各種グッズへの展開と広報活動が変化したそうです。「見てもらうもの」という意識は、キャラクターの有無に関わらず広報には常に必要だと思いました。

ちゅーりっぷさんの影が薄いことが課題の一つとして挙げられていましたが、筑波大学の図書館システムの名前 (Tulips) から生まれたキャラクターであり、がまじゃんぱー単独だと図書館との関連性が弱くなるので、これからも二人一組での活躍を期待したいところです。二人一組にしたのは Q&A で用いるためだそうです。図書館情報メディア研究科・附属図書館研究開発室と共同で作成された『リテラシー教本 (試作版)』では、二人一組による Q&A が効果的に使われていました。例会当日は時間の都合で全ては紹介されなかったのですが、レジュメには教本の一部が掲載されています。次の URL からご参照ください。(http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/~garu/100206.pdf)

紹介されている活用事例の数は圧巻で、それぞれの事例からは、職員の皆さんのキャラクターに対する愛着が感じられます。キャラクターを活かすための秘訣はそこにあるのかも知れないと思いました。

たにもと ちえ (神戸市外国語大学)

大図研京都ワンディセミナー

「サービス向上・業務効率化に使えるアプリを企画し試行提供する」参加報告

「図書系職員のためのアプリケーション開発講習会」にみる講習会モデルと

サービス向上・業務効率化への取り組み

大西 賢人

3月22日、京都市国際交流会館にて大図研京都ワンディセミナー「サービス向上・業務効率化に使えるアプリを企画し試行提供する」が開催されました。今回のセミナーでは、発表者の東京大学社会科学研究所図書室の前田朗氏が講師をされている「図書系職員のためのアプリケーション開発講習会」をテーマに、講習会の概要、講習会立ち上げにいたる経緯や講習会モデルについてのご講演と、開発されたアプリケーションのデモ、および参加者との質疑応答などがおこなわれました。以下、当日のセミナーの概要についてご紹介致します。

「図書系職員のためのアプリケーション開発講習会」(以下、「講習会」と略)は東京

大学情報基盤センター（以下、「情報基盤センター」と略）が主催する東京大学の図書系職員のための講習会で、ITを積極的に活用する人材を育成し、またその成果物であるアプリケーションを積極的に試験公開することによって、利用者のサービスの向上や業務効率化につなげることを目標として2007年から開催されています。参加する受講生は、自分自身で作成するアプリケーションの企画・立案をおこない、開発もそれぞれ自力でおこなうことが求められます。毎年7月に受講生の募集があり（東大の人事異動は7月が中心のため）、9月の企画宣言会の後、それぞれ開発をすすめ、翌年2月に成果発表会をおこなう、という年間スケジュールになっています。既存の図書館システムの改変や、開発に必要なアプリケーションの作成はできない、という制約はありますが、受講生は情報基盤センターが管理するサーバ環境を使用して、それぞれ関心のあるプログラミング言語で開発にとりくむことができます。また、プログラミング経験のない受講生でも、前田氏や情報基盤センターの二宮氏をはじめとする講師の方による講習会や、WikiやML等を使用したきめ細やかなサポートを受けることができます。さらに、完成したアプリケーションが、業務に支障がない範囲で実際に試行サービスとして公開されるという点がこの講習会の大きな特色のひとつです。どのようなアプリケーションが開発されたかについては講習会のサイトに一覧が掲載されていますが、利用者サービス向上のためのアプリケーションとしては、Webブラウザと連携した東大OPACの検索機能、Amazonからの東大OPACリンク、リンクリゾルバ対応などさまざまな機能をもつFirefoxプラグインソフト「東京大学版 LibX」、GoogleのポータルiGoogle上で使用できる自作の「iGoogleガジェット集」、「東大OPACから東大生協在庫検索へのリレー検索」、「iPhone用東京大学OPAC」、CiNiiの検索ページにキーワード候補一覧機能を付与するIE、Firefoxアドオン「CiNii with 関連検索ワード」などがあります。また、学内の図書館（室）間の資料の返送状況を管理する「図書館間返送管理システム（「楽返君）」、Plaggerを使用した「附属図書館HP新着ニュースのメール自動配信」、OPACの書誌・所蔵データをバッチ処理で取り出す「OPACダウンロード」などの業務支援ツールも数多く開発されています。なかでも全学導入された楽返君は業務効率化に大きく寄与したとして、講習会の枠を超えた《図書返送効率化プロジェクト》として平成21年度の東京大学総長賞を受賞され、講習会は単なる受講生の企画・立案能力や開発力のレベルアップだけでなく、アプリ作成による利用者サービス支援、そして業務の効率化という図書館の活性化にも効果を発揮しているとのこと。また一部のアプリケーションは東京大学以外の図書館でも使用できるようオープンソース化を検討されているとのことでした。

セミナーでは前田氏がこのような講習会をたちあげられた背景についても紹介いただきました。既存の業務システムに不満を感じていたとしても、ITに関する知識や能力がないために業者に外注せざるを得ないが、予算が確保できずあきらめる、といった図書館員とシステムとの関わり方を改善しようと前田氏は「言選Web」などのシステム開発を通じてアプリケーション作成分野で図書館員が自らプログラミングすることの意義をうったえ、「やる気があれば成果を出せる」というその経験知を若手に伝えるためにこの講習会を企画されたということでした。当初は図書館内の正規の研修として開催することも検討されたそうですが、受講生自身が企画・立案・開発すること、開発したアプリケーションを試験公開すること、前田氏の経験知を受講生に伝えることの3点を実施するため現在のような開催形式（前田氏はこの形式を「講習会モデル」とよんでいます）をとられたということ。もちろん、レベルアップのための方式として講習会がすべての受講生に効果的な学習方法かどうか、基本的知識がない場合のレセプターはどうするか、モチベーションをどう維持して高めていくか、受講者間の企画・立案能力や技術力・実行力の個人差、講師となる後継者の育成など課題はあるものの、開始してまだ3

年しかたっておらず、もう少し継続して「熟達化」するまで、より長い視点で講習会モデルをとらえてみたいというお話でした。

セミナーの最後にもうけられた 50 分間の質疑応答・意見交換では、サーバ、プログラミング言語等の開発環境やアプリケーションの仕組みといった技術的な質問、図書館と講習会と情報基盤センターとの関係について、会場から多くの質問・意見がだされました。個人的には「講習会に他機関、他地域の人間がオンラインで参加することは可能か？」という質問が大変興味深く感じられました。この質問に対して前田氏は「講習会用サーバへの接続権限等の関係で難しい。」と回答されましたが、セキュリティの面から考えても私もその通りだと思います。ただ一方で、自前でアプリケーションを開発するサーバ環境を準備することが難しい機関の場合や、前田氏のように開発時のサポートして下さるような存在が近くにいない場合に、このような要望がでてくるのも理解できます。もちろん、すべての図書館員がアプリケーションの開発ができる必要はないと思いますが、前田氏も講演の中で言及されていたように「大学図書館における情報専門職に関する調査：LIPER 大学調査班中間報告」では「図書館員に必要な知識・技術」として若手職員の 9.43%がプログラミングをあげており、少ないとはいえニーズがあることがわかります。特に、大学図書館を中心に、オープンソースの機関リポジティブソフトウェアや、次世代 OPAC、電子資源管理システムなど従来ベンダーから提供されてきたようなパッケージ型図書館業務システムとは異なるシステムの導入や仕様の検討などに図書館員が深く関わるケースが増加してきています。そのため今後、東大で開催されているような講習会のニーズはますます高くなり、東大だけでなく複数の機関が協同で企画・参加するような講習会が近い将来必要とされるようになるのではないのでしょうか。そんな日が来ることを待ち望みつつ、まずは「図書系職員のためのアプリケーション開発講習会」の Web サイトで公開されているアプリケーションの一つを自機関でも使用できるようにカスタマイズするところから始めてみようと思います。みなさんもチャレンジしてみませんか。

おおにし まさと（京都大学附属図書館情報管理課電子情報掛）

<参考文献>

前田朗. 実用アプリケーションの企画・開発により学ぶ大学図書館職員向け講習会モデルの考察：「図書系職員のためのアプリケーション開発講習会」を例にして. 大学図書館研究. 2009, 86, 19-27. (オンライン), 入手先

<https://mbc.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/lecture/Consideration_of_the_Library_Staff_Workshop_Model.pdf>, (参照 2010-04-26).

前田朗.“「図書系職員のためのアプリケーション開発講習会」講習会資料リスト”. (オンライン), 入手先 <<https://mbc.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/lecture/>>, (参照 2010-04-26).

東京大学情報基盤センター.“「図書系職員のためのアプリケーション開発講習会」成果”. (オンライン), 入手先 <<https://mbc.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/products.html>>, (参照 2010-04-26).

"大図研京都ワンディセミナー「サービス向上・業務効率化に使えるアプリを企画し提供」 - みききしたこと。おもうこと。". (オンライン), 入手先

<<http://d.hatena.ne.jp/xiao-2/20100322/1269269983>>, (参照 2010-04-26).

"大学図書館問題研究会 京都支部 ワンディセミナー - 図書館の中では走らないでください!". (オンライン), 入手先
<<http://d.hatena.ne.jp/klarere-himmel13/20100327/1269716901>>, (参照 2010-04-26).

大図研京都ワンディセミナー

「サービス向上・業務効率化に使えるアプリを企画し試行提供する」参加報告

興味や思いをかたちに変える ～アプリケーション開発講習会の魅力

吉田 弥生

3月21日(月・祝)に開催された、標記セミナーに参加させていただきました。3連休中にもかかわらず、会場はほぼ満席で、このテーマに対する関心の高さがうかがわれました。

私自身はなかなか不精で、こうしたセミナーなどに参加することは少ないのですが、今回関心を持ったきっかけは2つありました。まず1つ目は、そもそもこのセミナーのことを知ったきっかけでもあったのですが、職場の方と図書館システムの次期リプレイスについて立ち話をしていた際、よりニーズに合った製品を導入するのはもちろん望ましいが、もし不足があった場合、自分たちでそれを補うアプリケーションを開発・公開している東京大学の事例があり、ちょうどこのセミナーでお話を伺える、と教えていただいたことでした。そしてもう1つは、本学でも、すでに上司や先輩方の一部が、大量のデータ処理にPerlを用いたり、JavaScriptやRubyを使って、現在の図書館システムで足りない機能を補うプログラムを自作・公開・配布している例があるのを見て、以前から興味をもっていたためです。さらには、東京大学と同じ図書館システム(NEC社のLICSU-Web)を本学でも使用している点も、お話を伺いたいという大きな理由になりました。

前置きが長くなりました。本セミナー参加報告として、東京大学で行われている「図書系職員のためのアプリケーション開発講習会」について感じたことと、その講習会の成果として開発・公開されているアプリケーションのうち特に印象に残ったものについて書かせていただきます。

1. アプリケーション開発講習会について

アプリケーション開発講習会は、今回の講師の前田氏(図書系職員)と情報基盤センターとの連携により、立ち上げられたものです。立ち上げに際しては、附属図書館の研修プログラムの一部とすることも検討されたそうですが、あいにく適わず、情報基盤センターの講習会(公式)として始められたとのことでした。2007年から始まり、現在も続き、かつ、これまでの受講生の方々が講習会の成果としてアプリケーションを試行サービスとして公開するまでに至っているとのこと。以下、私見ですが、その成功の鍵になったのでは、と感じたことなどを挙げさせていただきます。

- ・研修の形式にこだわらなかったこと。

研修の扱い(立ち位置)については、セミナー参加者から多く質問が寄せられていました。

図書系職員のスキルアップと、業務効率化・利用者サービスの向上を目的とする研修事業ということで、成果を職員の評価などに反映させるためには、附属図書館の研修プログラムに載せることができれば一番望ましいのかもしれませんが、けれども、講師の前田氏ご自身が身につけられたスキルを後継の職員に伝えていくこと、また、職員の間にある IT スキルを向上させたいという潜在的なニーズに応える、という 2 点をとにかく実行することを重視し、あえて附属図書館の研修プログラムとすることにこだわらずに進められたことは、講習会を実現させられた要因として大きかったと思います。

それでいてかつ、この講習会以前に進められていた『言選 Web』プロジェクト」を素地として、情報基盤センターの公式な講習会として実現されたことで、参加を希望する職員が職場の理解を得やすいという環境が生まれていて、この点については、とても幸運だったと、前田氏も述べられていました。

- ・受講者が日々の業務やサービスに直結するアプリケーションを自主的に開発できること。

IT 技術のスキルアップ研修や講座は色々ありますが、実務に即応できるかどうかで、モチベーションや達成度、熟達度は明らかに違ってくるはずです。誰しも、既存の図書館システムや OPAC などを使っていて感じたことのある、物足りなさ、かゆいところに手が届かないようなはがゆさを、自分の努力で解決できる可能性があるとしたら、受講に際してたいへん大きな動機づけになると思われれます。また、図書館システムに対する不満や不便さといったマイナスの面をプラスのエネルギーに変えられる点、業務の効率化によって得られた余力をまた新たなサービス・業務に注げるといった副次的な効果についても、たいへん共感できました。

- ・開発のためのプログラミング言語について、参加者の自由選択にまかせていること。それでいて、きめ細かにフォローアップされていること。

「プログラミング言語について、特に限定はしていません。」という談に驚きました。講師は前田氏と情報基盤センターの教員の方とで担当されているとのことなのですが、受講者からの相談は随時受け付けて、フォローアップする体制をとられているそうです。初心者が選択する言語は限られているのだとは思いますが、受講生それぞれが自分に合ったやり方で、アプリケーションを完成させることを重視して、それ以外にはこだわらないという方針が感じとられました。なかなか他の大学で同じような環境を整えるのは難しいかもしれませんが...

2. 特に印象的だったアプリケーション

アプリケーション開発講習会で受講生の方々が作成された成果は、Web ページで公開されているとのこと（<https://mbc.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/products.html>）。セミナーでは、実演を交えながら説明いただきました。中でも、私自身が特に使ってみたく感じたもののうち 2 つだけ、ここで紹介させていただきます。

- ・東京大学版 LibX

いくつか機能があるうち、Amazon 日本版サイトの検索結果に OPAC へのリンクボタンを生成する機能が特に興味を引きました。利用者へのサービスという点だけでなく、職員が選書で Amazon を情報源として使う際、自館の所蔵状況を確認するのは必須の作業ですが、書誌情報を OPAC へコピー&ペーストする手間が省けると、たいへん効率的です。

- ・ 東京大学 OPAC バスケット

製品としての OPAC に標準機能としてあっても良さそうなのに、意外とあっさりなかったりします。これがあると、検索結果の詳細を見比べたいがためにウィンドウやタブがいっぱい...なんてこともなくなり、便利です。ひとつ気になったのは、試行的なサービスだからでしょうか、東京大学の OPAC 画面と、附属図書館の Web サイトを拝見しても、この機能を紹介するページへのリンクなどが見当たらなかったことです。「情報基盤センター 図書館電子化部門」へのページリンクがあり、その中の「図書館職員作成公開ツール」（上記の講習会成果公開サイトに同じ）の中で紹介されていました。

3. まとめ

今回お話しいただいたアプリケーション開発講習会は、日々の業務の中で発見できた改善ポイントを IT 技術のスキルアップを兼ねて実現してみよう、という現実的かつ魅力的なものでした。受講生の方々の中にはアプリケーションの完成・公開までには残念ながら至らないケースもあるとのことでしたが、「やってみたいな」という興味だけで終わってしまったかもしれないことを、「とにかくまず、やってみた」という結果に変えられた、この講習会の存在は大きかったのではないかと思います。（セミナーを聞いて、自分も何かやってみたいと思った私ですが、その後日常業務に取り紛れて、後回しの日々です...。）

末筆になりましたが、このような成果を公開してくださった講師・受講生の方々、そしてお話を伺える機会を作ってくくださった大図研京都支部の方々に感謝いたします。

よしだ やよい（大阪大学附属図書館）

大図研京都ワンディセミナー

「サービス向上・業務効率化に使えるアプリを企画し試行提供する」参加報告

外付け機能が面白い！図書系職員が企画開発するアプリケーション

是住 久美子

平成 22 年 3 月 22 日（月）に京都市国際交流会館で開催された大図研京都ワンディセミナー「サービス向上・業務効率化に使えるアプリを企画し試行提供する」に参加してきました。

折しも、国立国会図書館デジタルアーカイブポータル（PORTA）やレファレンス協同データベースの API 公開などのニュースを受け、自分の勤務する図書館においてもこれらを使って「何か、コストをかけずにサービスを提供することができないか」と考えていたところだったので、非常にタイミングよく事例を知ることができ、有意義な時間を過ごすことができました。

セミナーではまず、講師である東京大学社会科学研究所の前田朗氏が、「図書系職員のためのアプリケーション開発講習会」という課題解決型の講習会において、図書館職員である受講生が利用者サービスの向上や業務効率化を目的として自ら企画開発したアプリケーションを試行公開するまでの流れを説明されました。

講習会で使用された資料については、「図書系職員のためのアプリケーション開発講習会」講習会資料リスト（<https://mbc.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/lecture/>）として Web 上で公開

されています。受講生になったつもりで拝見すると、どのような技術を使ってどのような事が出来そうかということ、またどういうプロセスでアプリケーションの企画から開発まで行えばよいかというイメージを掴みやすい資料であると感じました。課題を解くことで段階的に知識を身に付けられる工夫や陥りがちなトラブルへの対処方法などもあり、API を使って何かできないかと考えてはいるものの、何から始めたらよいかという最初の所で足踏み状態の私にとっても、大変参考となる教材です。

アプリケーションの開発段階では、受講生が気軽に講師に相談できるフォロー体制や自由に使用できる専用のサーバがあり、開発環境が整っているとのことでした。業務システムの保守・運用を行っている情報基盤センターの理解と協力によりこれらの開発環境が提供されているそうです。

開発したアプリケーションは原則として試行公開するというこで、「図書系職員のためのアプリケーション開発講習会」成果

(<https://mbc.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/products.html>) として、「利用者向けサービス」、「全国大学図書館員向けツール」、「業務担当者向けツール (東京大学附属図書館職員限定)」、「開発中のアプリケーション」のカテゴリ毎に開発者の氏名とともに公開されています。これらのアプリケーションを見ていると、大学図書館利用者のニーズや大規模大学図書館での日常業務の課題が垣間見えるような気がしました。図書館間返送管理システムなどは公共図書館向けのシステムであればパッケージで分館間物流管理機能などとして含まれていることが多く、大学図書館向けシステムとの違いなども感じられました。

この講習会では、アプリケーションという目に見える成果以外にも、受講生の IT 知識習得や、企画・立案能力やツール開発力を鍛える効果があり、図書館の活性化にも有効であったことが報告されました。

今回の取組み内容を聞いて、確かに業務システム本体にそのような機能を組み込めることがベストではあるけれども、コストやリスク等影響の大きさや、システムリプレイスのタイミングに合わせる必要などのハードルの高さに比べて、外付け機能的なアプリケーションとして試行公開するという方法は、コストやリスクが低く、多種多様で小さいニーズにも迅速に応えることができるという面でメリットがあると思いました。実際にそれらのアプリケーションがよく利用され、効果があることが証明されれば、次期システムへの組み込みも可能となり、いわば個々のアプリケーションがプロトタイプ的な性格を持つものでもあったと感じました。

私もオープンソースで利用できる言語やデータベース、API を利用して、「ちょっとした便利アプリ」開発に取り組んでみたいと思います。

これずみ くみこ (京都府立図書館)

第 11 回灰色文献国際会議に参加して

池田 貴儀

※ 著者の希望により非公開になっております。

◇ 会費納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしているところですが、納入率は依然思わしくない状態にあります。既に2009年度(大図研会計年度2009.07 - 2010.06)に入っておりますので、2009年度の会費の納入をお願い致します。また、2008年度以前の会費をお納めいただいていない会員のみなさま、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願い致します。

会費は、¥7,000(大図研会費：¥5,000+京都支部会費：¥2,000)です。

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員におことづけください。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904 大学図書館問題研究会京都支部

また、ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部(dtkek@rg7.so-net.ne.jp)、または支部委員(組織・財政担当)の渡邊伸彦(〒606-8317 京都市左京区吉田本町 京都大学附属図書館資料管理掛 気付 渡邊宛 電話：075-753-2647)まで。